

古

畑

直

定

朗



〜法廷で会いましょう、検察官〜

2

## 事件

---

「えー、偉い人こそ、悪い事をするなんて言葉聞いたことありませんか?・・・ないですね。はい。えー、とにかく、偉くなったら、決して、悪い道へは進まないようにしてください。ちなみに、私は・・・へへへ。」

東京地方検察局 丸の内オフィス

「あなたを、殺人罪で起訴します。良いですね。」

検察官、青田ZAP(ざっぷ)隆一郎。ミドルネームがあるのは、母親が、アメリカ人である事から。青田は、感じていた。今日は、いつもと違う一日になると。自分の心の中では、早く動きたい気持ちでいっぱいだった。

「取り調べを終わります。」

被疑者が警護官に連れられて出て行った。事務官の水野美奈が、

「今の被疑者、目つき悪かったねー。」

「ああ。」

「何も、浮気したからって相手を殺さなくても良いのにね。」

「そうだな。・・・っていう、お前は、どうなんだよ。」

美奈の顔色が変わった。

「美奈、あの浮気相手と続いてんだろ?」

「ねえ、隆一郎。続いてなんか無いよ。いい加減、信じてよ。」

「じゃあ、昨日の夜、どこ行ってたんだよ。」

「昨日は、佐伯事務官と飲みに行っただけ。」

「ふーん。そうなんだ。」

「信じてないのね。」

隆一郎は、事務官である美奈と婚約していた。しかし、入籍を目前に控えた日、たまたま、美奈と男が、歩いているところを目撃してしまったのだ。それだけなら、友達と歩いているのかと隆一郎は、思ったのだが、その二人は、ラブホテルへと消えて行ったのだった。

次の日の美奈を問い詰めると、少し、気が緩んだだけと言ったのだった。入籍は見送り、二人は、一応、恋人同士に戻ったのだが、という状況だった。

「まっ、良いわ。・・・あれ?今の被疑者の資料、どこやったんだろ?」

「ああ、さっき、書庫行ったときに置きっぱなしにしてきたんじゃないか?」

「うっそー、持ってきたと思ってたのに。ちょっと、私、書庫に資料取りに行ってくる。」

「うん。」

「ねえ、隆一郎、やっぱり私たち、結婚出来ないのかな。」

「さあな。お前が本当に反省してくれれば、状況が変わるかもしれないな。」

「・・・。あっそ。」

美奈は、出て行った。

「残念さ。美奈・・・。」

そして、隆一郎は、すぐに行動に移した。

自分の部屋から急いで出た。すると、警備員の土井がいた。

「お疲れ！」

「お疲れ様です。青田検事。どちらかお出かけですか？」

「ハハハ！トイレ！」

「あっ！検事！」

「話は、あとで!!」

そして、美奈が向かった書庫へと向かった。

静かに、書庫へと忍び込んだ。

「あれー、ないなあ。どこやったんだろ。あっ！あった。なんで、こんなところに？」

本棚の反対側から、隆一郎は、

「美奈。」

「わあ！隆一郎、何してんの?!」

「ごめんな。死んでくれ。」

「え?!」

隆一郎は、思いっきり、その本棚を倒した。美奈は、悲鳴を上げながら、その本棚の下敷きになった。

「浮気なんかしたからだ。」

そして、隆一郎は、書庫を出た。そして、部屋へと戻った。そういえば、警備員の土井が、何か、話そうとしていたが、どこかに行ってしまったらしく、守衛席にいなかった。

とにかく、部屋に戻った隆一郎は、一息ついた。

「やっちまったな。」

そして、次の被疑者が来る時間になった。警護官が連れてくる。

「あれ？水野事務官、どこ行ったか知らない？」

「いえ、僕はわかりません。」

「マジで？」

「どうしますか？」

その時だった。“うぁー!!”という叫び声が響き渡った。

発見したのは、土井警備員だった。

## 捜査

---

「古畑さん、まだ？」

泉舞刑事が、部下の杉島に聞いた。

「いえ、見かけてませんが。」

「全く、どこいっちゃったんだろ。」

「一緒に来たんですか？泉舞さん。」

「うん、一緒に来たんだけど、この建物に入った途端に、どっか行っちゃって。まっ、来なくても、僕が、解決してやるけどね。ハハハ。」

「う～ん、誰が解決してくれるのかなあ？へへへ。」

「ふ、古畑さん!!」

古畑直定朗がやってきた。

「で、また自殺？」

「またとか、言っちゃダメですよ。しかも、今、救急車で搬送されるの見たでしょ!!」

「あー、ごめんごめん、DIE。」

「えーと、被害者は、水野美奈さん。23歳。東京地検丸の内オフィスの事務官です。」

「若いねー。かわいいし。可哀そうに。」

「エロオヤジ。」

「うーん、泉舞君？なんか言ったあ？へへへ。」

「いえ。」

「どうやら、この本棚が倒れてきたようですよ。」

「ふーん。本棚がねえ。」

そして、杉島が、

「古畑さん！第一発見者の、土井さんです。」

「あっ、どーも。」

すると土井が、古畑を見て、

「あっ！あなた！」

「ん？どっかで会った事ある？」

「あの！とんちんかな歌を歌う人ですよね！」

「とんちんかん？」

「ほらあ、西新宿の、キャバクラ御釜で、良く会うじゃないですか。」

「・・・ああ～、君ね。」

泉舞と杉島が、

「古畑さん、意外とむっつりですな。」

古畑は、知らん顔をして、

「で、DIE。じゃ、なくて、発見した時は？」

土井が、

「大きな物音がして、駆け付けてみたら、この有様で。」

「そう。」

「すぐに、検事に知らせようと思ひまして、部屋に行ったんですが、いなくて。たぶん、トイレに行っていたんだと思います。」

「誰の担当なの？」

「青田検事です。青田ZAP隆一郎検事。」

「ああ、そう。ちなみにい、なんで、その青田検事が、トイレに行ってたこと知ってるの？」

「ここに来るちょっと前に、廊下で会ったんですよ。その時に、トイレ行くッて走っていったんで、相当急いでましたよ。でも、この階のトイレ、修理中なんで、それ伝えようとしたら、あつという間に、走って行っちゃって。」

「ふーん。とりあえず、泉舞君、その青田なちゃらを連れてきて。」

「古畑さん、青田検事です。変なとこ、濁さないでくださいよ。呼んできます。」

泉舞が、呼びに行った。

「じゃ、土井さん、ありがとう。」

土井は、守衛室へと戻っていった。

少しして、青田検事と、泉舞刑事と一緒にやってきた。

「わざわざ、呼び出してすみませんね。へへへ。」

「どうしたんですか？ん・・・なんですか?!このありさまは。」

「いやー、どうやら、本棚が倒れてしまったようで。」

「で、誰がここで?!」

「あつ、えーと。」

泉舞が代わりに、

「事務官の水野さんです。」

「水野?!なんてこった・・・。まだ、若いのに。」

「あつ、いや。」

泉舞が言おうとしたのを制止して、古畑が、

「お気の毒です。」

「まだ、俺のところにきて、2ヶ月も経ってないんですよ。ほんと。こんな事になるなんて・・・。」

「あーの一、青田検事？」

「はい？」

「あなた、もしかして、水野さんが亡くなったと思ってます？」

「亡くなったんじゃないんですか？」

「またあ、ハハハ。生きてますよ。」

「え？」

「私たちがここに到着する直前に、帝都大学病院に運ばれていきましたよ。」

「・・・あつ、なーんだ。助かったのか!!ハハハ、良かったー。で、意識は？」

「いやー、まだ、戻らないようです。」

「そ、そうですか。とにかく、助かったなら良かったですよ。じゃ、俺は、これで。」

「あー、ちょっと待ってもらえますか。へへへ。」

「何ですか？」

「一応、アリバイをお聞かせいただいてもよろしいですか？」

「なんですか。こりゃ、事故でしょ？」

「いえ、事故じゃないんですよ。それが。」

「どういう事ですか？」

「書庫は、あまり使われていないようです。埃だらけです。でも、考えてみてください。こんな本棚が、普通、倒れるわけじゃないですよ。」

「まあ、かなりの年代物ですから、なんかの拍子に倒れたんでしょう。ココは、基本的に、かなり昔の事件の書類しかないの。」

すると、古畑は、その本棚の近くへ、青田を連れて行った。

「そうですね。でも、見てください。ココ。ほら、ここだけ、綺麗に埃がないんです。どうやら、水野さん腕を組んで、ここに乘せていたようです。ちょうど、水野さんが、倒れていた所と一致しますしね。しかも、昔の事件の書類しかない部屋に、なぜ水野さんは来たんでしょう？」

「それは、ちょうど、水野がここへ来る前の事件の資料が必要で、何年か昔の事件と酷似していたんで、取りに来たんでしょう。」

「そうですか。」

「つまり、殺人事件だと。」

「いえ、青田検事、殺人未遂事件です。」

「ああ、失礼。」

「で、アリバイを。」

「ああ、トイレに行っていましたよ。」

「何分ぐらい？」

「何分？まあ、2、3分ですかね。小さい方でしたから。」

「そうですか。」

すると、先ほどの警護官がやってきて、

「青田検事、取り調べ、どうしますか？」

「ああ、じゃあ、松野事務官呼んで！今から、やります。っていう事なんで、古畑さん、もう良いかな。」

「はい。お工作中、失礼いたしました。」

青田は、小走りで、書庫を出て行った。

「えー、みなさん、お分かりですね。今回の犯人、青田検事で間違えなさそうです。私のひっかけにまんまと引っかかってもらいました。みなさん、殺人を犯すなら、もっと念入りに計画を練ってください。その前に、殺人は、犯さないでください。へへへ。古畑直定朗でした。」

## 解決

---

午後8時。青田ZAP隆一郎の検事室。

隆一郎にとって、長い1日が終わろうとしていた。だが、美奈が活着ているとなると、自分の犯行がばれるのも時間の問題である。隆一郎は、このまま、逃亡する事を考えていた。たまたま、今日は、自分の車で出勤している。このまま、逃げてしまえば。

と、そこへ、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい？」

「夜分、遅くまで、ご苦労さまです。古畑です。」

「どうぞ。」

「度々すみません。いやー、検事室というのは、広いですねー。刑事の端くれの私からしたら羨ましい限りです。へへへ。」

「この部屋は、たまたまです。角部屋で、もともとは、倉庫だったんですよ。そこを改造したんです。だから、日当たりはすごい悪いですよ。」

「へえ。」

「で、犯人わかりました？それとも、やっぱり事故でした？」

「へへへ。事故ではありません。やはり、事件です。」

「そうですか。・・・もしかして、俺の事、疑ってます？」

「そのお、もしかしてです。」

「先に言っておきますけど、古畑さん、僕は、確かに、水野と婚約してました。だからと言って、動機なんかありませんよ。」

「松野事務官から、聞きました。お二人の関係は。」

「あっ、そう。松野から聞いたの。」

「で一も一ね、青田検事、ど一も、松野さん、様子がおかしくてですね、私、ネチネチ問い詰めたんですよ。そしたら、白状してくれました。水野さん、浮気していたんですね。松野さんと。へへへ。」

「・・・。」

「動機が出来ましたね。青田検事。」

「・・・でも、俺には、アリバイがあります。」

「トイレですか？」

「ええ。僕が、トイレに行っている間に、起きたわけでしょ。」

「ええ。」

「だから、無理ですよ。」

「あなたあ、どこのトイレに行きました？」

「どこって、そのの。」

青田は、すぐそばのトイレを指差した。

「そこですか?!」

「そこですよ!!」

「そこの!!」

「だから、そこのトイレだつーの!!しつこいですよ!!古畑さん。」

「ふーん、嘘ですね。それは。」

「はあ?」

「あなた、土井さんに、きちんと話を聞いておくべきでした。」

「どういう事ですか?」

「青田検事、そのトイレじゃ、用を足せないんです。」

「え?」

「この階のトイレは、そこだけです。しかも、そのトイレは、今日の朝早く、土井さんが、水漏れしている事に気付き、すぐに修理業者が来たそうです。しかも、1日では、部品が足りなくて、修理できず、一度、便座ごとすべて外して持って行ってしまったそうです。つまり、あのトイレ、今、何にもないんです。」

青田は、ビックリした顔で、黙り込んでしまった。

「まさか、何にもないところで、用を足したわけじゃないですよ?」

「・・・ハハハ。まあ、男ですからね、我慢できなくて・・・ってそんなわけないでしょ。一応、大人ですから。」

「他の階のトイレを使ったとしても、5分以上かかってしまいます。2、3分じゃ、戻ってこれません。」

「ですね。あーあ、このまま、逃げようと思ったのに。水野・・・いや、美奈は、大学の後輩でした。かなり、長い期間の恋愛を得て、やっと入籍を決めたのに、同じ、大学の同級生であるあんな男と・・・。」

「青田検事、松野さん、言ってました。あれは、浮気じゃないんだって。」

「・・・え?」

「あなたが、水野さんと松野さんが、ラブホテルに入っていくのを見かけたその日、実は、松野さんの彼女さんの浮気調査をしていたらしいんですよ。同級生である、水野さんに、相談していたらしく。」

「じゃあ、なんで、美奈は、その事を・・・。」

「あなたが、あまりにも怒るもので、言い返せなかったらしいですよ。」

青田は、その場にしゃがみこんでしまった。

「・・・え・・・、なんで・・・。」

古畑の携帯が鳴った。

「あー、もすもすモスバーガー。—うん、うんうん。—はいはい、わかりました。青田検事、水野美奈さん、意識が戻ったそうです。」

「・・・警察に行く前に、寄っても良いですか。」

「ええ。病室という名の法廷に行きましょう。」

「古畑さん、最後だけ、意味がわかりません。」



「へへへ。」

二人は、部屋を出て、水野美奈が入院している病院へと向かった。

2006年12月31日

著・三楽亭 田嶋

古畑直定朗2~法廷で会いましょう、検察官~

<http://p.booklog.jp/book/26363>

著者：三楽亭 田嶋

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanrakutei/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26363>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26363>